

特別指定研究

大谷探検隊将来トカラ語資料をめぐって (1)*

荻原裕敏・慶昭蓉

1. 導入

大谷光瑞師によって派遣された三次にわたる大谷探検隊が、漢語・ウイグル語・ソグド語・チベット語・梵語・コータン語といった言語で書かれた資料以外にもトカラ語資料を将来していた事は、『西域考古圖譜』で出版された図版によって既に知られているところである。そして、彼らが齎した資料には、現在まで出版されていない文書も数点存在しており、それらの写真が Emil Sieg と Wilhelm Siegling だけでなく Sylvain Lévi や Walter Couvreur といったヨーロッパのトカラ語研究者に提供されていた事実も、彼らが出版した論文や Krause (1952: 310) の記載から窺う事ができる¹⁾。

では、彼らが齎したトカラ語資料の総数は、どのくらいの規模に及んだのだろうか。残念ながら、この点については、最近まで旅順博物館所蔵資料が公開されていなかったため、全く窺う事ができない状態が続いていた²⁾。そのため、本研究は、旅順博物館所蔵資料以外の大谷探検隊将来トカラ語資料の全体像を明らかにする事を目的とする。

2. 龍谷大学図書館蔵 MS00541 について

2.1. 研究史

先に述べたように、本研究は、旅順博物館所蔵資料以外の大谷探検隊将来トカラ語資料を研究対象とするが、寺院出納簿 MS00541 は断片ではなく全体が残っており、また歴史学的に見て極めて重要であるため、専ら本稿で取り上げる事とし、その他の資料については稿を改める事としたい。

龍谷大学図書館蔵 MS00541 は、『西域考古圖譜』において西域語文書のサンプルの一つと

1) 井ノ口 (1961: 343) では、9 点のトカラ語資料の写真が提供されたとされている。これらの内、現在までに出版されているのは、*TochSprR(B)II*: 121 で Nr. 204 という番号が付された *Buddhastotra* 断片と Couvreur (1965: 135-136) で出版された音韻表・医方書・経済文書を内容とする断片一点である。

2) 旅順博物館所蔵トカラ語資料については、荻原が、旅順博物館と龍谷大学による共同プロジェクトに参加・調査を行っており、その成果を公表する予定である。

して、都貨羅語文書寺院出納記録(庫車)というタイトルの下、図版(12)として初めて出版された(本稿では、以下この番号に従って当該断片を Ot.12 と称する事とする³⁾)。『西域考古圖譜』で出版された図版にはローマ字転写が付されているが、この転写が誰によるものかについては記載がないため、現在明らかにし得ない。ただ、Lévi が利用した当該断片の写真は榊亮三郎氏によって提供されたものであるため、この転写も榊氏によるものではないかと推定されている⁴⁾。多くの点で修正を要するとは言え、『西域考古圖譜』に付された転写から、この文書の内容を窺う事が可能である。

その後、このトカラ語文書の新しい図版と転写が井ノ口(1961)によって出版され⁵⁾、『西域考古圖譜』所収の転写に多くの修正が為された。ここには、当該文書の和訳だけでなく、この論文が出版された時点では、ベルリン所蔵のトカラ語 B 寺院経済文書に関する Sieg and Siegling (1950) の研究成果を利用する事ができたため、歴史学的な分析も提出されている。論文中に指摘されているように、トカラ語 B の言語学的な問題については、主に Walter Couvreur に意見を求めただけでなく⁶⁾、Werner Thomas (1957) が提出している転写も参考にした事が窺える⁷⁾。この井ノ口論文は、その後1995年に出版された論文集にも再録されているが、内容について変更は加えられていない。また、当該文書に関しては、最近、個別の部分に対する研究が提出されているが⁸⁾、全面的な再検討がトカラ語研究の観点から為される必要があり、本稿の意義はこの部分に求められる⁹⁾。

3) 同じ番号は Schmidt (1986: 638) 及び Malzahn (2007: 93-94) でも使用されている。

4) 井ノ口 (1957: 183) を参照。なお、この点については、この転写に Lévi と Antoine Meillet によって使用されている転写方法が採用されており、彼ら二人が協力、若しくは提供したものである可能性を指摘する事ができる。現在この点を解明する手がかりは残されていないが、少なくとも、彼ら二人はこの断片について、'dans un admirable état de conservation' (1912: 281) と言及しており、『西域考古圖譜』出版以前に、この文書に関する情報を得ていた事は確実である。

5) ここでは、既に現行の所蔵番号である No.541 が使用されている。なお、Malzahn (2007: 93-94) は Ot. 13.1 として紹介しているが、この断片に関する記述は部分的に誤っている。

6) Couvreur (1954: 90) には Otani-Klosterrechnung 018, 9 として当該文書の一部が引用されており、この事は、1950年代には彼がこの文書の研究を行っていた事を示唆する。また、Malzahn (2007: 94) で指摘されているように、この Couvreur の文書番号は Broomhead (1962) でも採用されている。ただ、Mironov (1928) において、この文書は既に O. 18 と言及されており、彼らの番号が何に基づいたものであるかは、現時点では不明である。

7) 井ノ口によって提出された転写は Thomas のものと全く同一というわけではなく、修正を施した箇所も見られる。なお、Thomas は Sieg 及び Siegling の当該文書の転写を部分的に修正して引用しているが、彼ら二人が文書の写真を提供されていたのか、若しくは『西域考古圖譜』所収の写真に基づいて転写を作成していたかについては不明である。ヨーロッパのトカラ語学者と大谷探検隊将来資料の関係は不明な点が多く、今後解明されるべき課題と言える。

8) Adams (2011) 及び Ching (forthc.a) を参照。

9) 筆者らは、指導教授であった Georges-Jean Pinault 教授(フランス国立高等学術研究院)の2007年3月以降の講義において、この文書について議論する機会を得た。ただ残念ながら、夏まで行われた講義では文書の解読は終了せず、その後は慶が博士論文執筆のため研究を続行した。本稿での議論は、主に Ching (2010: 86, 143-144, 339-341) に基づいている。

2.2. 文書の形態について¹⁰⁾

現在、Ot.12 は二枚の紙に挟まれた上で、巻物のように巻かれて単独で木箱に収められている。文書は裏打ちされているが、いつ頃その作業が行われたのかは不明である。文書が裏打ちされているため、紙質の調査には不確実な部分が存在する事は免れないが、筆者らの調査によると、文書に使用された紙の生地繊維は直径 1mm に及ぶ程粗いものが一部に見られ、漉き目の間隔は 4.5~5/cm である。ドイツ・フランス・ロシア所蔵のトカラ語 B 世俗文書と比較して、本文書の紙質は比較的粗く、厚さは普通よりもやや薄い、基本的に紙質は均質と言う事ができる。ただ、写真では明らかではないが、右上半分の生地繊維の分布は不均一である。具体的な紙質の特徴については、今後、より詳細な科学的調査が期待される。

文書の色は、Munsell のカラーチャート (year 2000 revised washable edition) では 10YR 8/2 'very pale brown'¹¹⁾ よりもやや黄色かがった色であり、文書全体に非常に細かい皺が確認されるが、いくつか比較的明確な左右に走った折り目があり、その内の文書の中央にある折り目は最も明確である。文書の左側は比較的汚れており、やや灰色がかっている。さらに、1 行目と 13 行目の始めの部分には濃い色 (10YR6/3 'pale brown'¹²⁾) の付着物の痕跡があり、恐らくは泥であろうと推定される。上半分の中央と下半分の中央には、それぞれ薄茶色がかった痕跡 (注 32 を参照) がみられるだけでなく、この部分には小さな破れ目が集中しているが、この原因については、以下で議論する。

その他、筆者らが観察した範囲内では、罫線として用いた折り目は確認できなかった。この点も文書の行間が一定していない状況と一致している。行間は平均して 3cm 程度であり、余白は上が 4.5~5.0cm、下が 2.2cm である。左側の余白は 1.5cm で、右側はしばしば紙の縁にまで文字が書かれている。紙の寸法は天地 (縦) が最長 40.1cm、左右 (幅) が最長 29.0 cm である。紙の四辺はほぼ完全に保存されているため、この文書そのものは一尺の紙一枚を使用したものと判断する事ができる。

墨色の濃淡は一定しておらず (6/N 'dark grey'~4/N 'grey'), 字も大きさが一定していない。他のトカラ語 B の世俗文書と比較した場合、この文書の字はやや小さいが、逆に 9・13・15 行目の字は他の行と比べてやや大きい。この文書はやや崩れた草書体で書かれているため、何人の筆記者によるものかという判断は困難であるが、同一の人物が異なる時点で連続して筆記したという可能性も否定する事はできない。一方、この文書の記載が九月から十一月と完全ではない点及び 1 行目の記載方法から、この文書は、より長い帳簿の内の一葉であったと考えられる。しかしながら、この文書は裏打ちされており、紙の上下が他の紙と貼り合わせら

10) この記述は、筆者らが 2011 年 3 月 30 日に行った調査に基づいている。なお、調査に際しては、龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員の橘堂晃一氏にお世話になった。特に記して感謝申し上げる。

11) フランス国立図書館の敦煌写本のカatalogで使用している 'beige clair' (10YR7/4~10YR8/3) の彩度 (chroma) よりもやや低い色である。

12) フランス国立図書館の敦煌写本のカatalog中の 'ocre foncé' (10YR6/4) よりもやや彩度が低い。

れていた痕跡が見られるか否かは判別できない。

2.3. ローマ字転写 (Transliteration)¹³⁾

- 1 *meñye āra meññe skante śak meñyatse meṃ mante śimprāyai śopaiś ʃe keś ysā-*
- 2 *re waltsām ʔ taryāka ñu cakamṇma ok tom ʔ sāñke wāłtsa*
- 3 *sthere dharmarakṣite śarsa sthere ślawarme [ś]arsa*
- 4 *warwaltsaitse parramañine kewye śalywe karyāṃte trai śaṅkaṃ piśśār tom ʔ ysāre*
wsa[m] ʔ cāk piś tom ʔ
- 5 *paṣkarōṣe śalywe karyāṃte swer ʔ śaṅkaṃ ysāresa ok tom ʔ*
- 6 *tsyāñk ʔ trai śaṅkaṃ karyāṃte śkas tom ʔ ysāresa*
- 7 *sthere dharmarakṣitetse aslyaimaṣai ysāre pāst ʔ wsam ʔ piś cakamṇma wi tom ʔ*
- 8 *meññe āra meñye warsaññe śkas meñyatse ne kapyāreś ʔ wāsitseś ʔ*
- 9 *ysāre rine plyasi wāya toṅkā śarmire śak cakamṇma śarmiretse kaṇci*
- 10 *prajñākarasometse wrātsaiseś ʔ kewye śalywe [ka]ryāṃte trai śaṅkaṃ ysāresa cāk piś tom ʔ*
- 11 *simā kurriṅkāteṃtse yaitkorsa ywārś ʔ śmañe pau[ś]yenta aṣkār ʔ sasākauwa ʃeyem*
yāywyem ykuweś ʔ re-
- 12 *cye cāsāṃtse ysāre wsam ʔ śak tarya cakamṇma piś tom ʔ ʃau nesam*
- 13 *wārsaññe pāłentiś ʔ mlyokotauṣṣe śalywe karyāṃte swer ʔ śaṅkaṃ ok tom ʔ ysāresa*
- 14 *patalakṣāṣṣemś ʔ pakeñe swer ʔ komtsa laṣṣāte pito ysāre kamāte cāk wi tom ʔ*
- 15 *mikkaswiñitse ynaikenta hkhainta [ka]ryām ʔ ysāresa piś tom ʔ*

2.4. 音素転写 (Transcription)

- 1 *meñye āra. meññe skante. śak meñyatse meṃ mante śimprāyai śopaiś ʃe keś ysā-*
- 2 *re waltsām: taryāka-ñu cakamṇma ok tom. Sāñke wāłtsa.*
- 3 *Sthere Dharmarakṣite śarsa. Sthere Ślawarme [ś]arsa.*
- 4 *warwaltsaitse parramañine kewye śalywe karyāṃte: trai śaṅkaṃ piśśār tom. ysāre*
wsa[m]: cāk piś tom.
- 5 *paṣkarōṣe śalywe karyāṃte: swer śaṅkaṃ, ysāresa ok tom.*
- 6 *tsyāñk trai śaṅkaṃ karyāṃte, śkas tom ysāresa.*
- 7 *Sthere Dharmarakṣitetse aslyaimaṣai ysāre pāst wsam: piś cakamṇma wi tom.*

13) 転写に対する注釈及び先行研究との相違点については、本稿の英語版として出版予定の Ching and Ogi-hara (forthc.b) を参照。なお、本稿では、本文書に対する歴史学的分析に重点を置いており、言語学的・文献学的な検討は英語版に譲りたい。

- 8 *meññe āra. meñye warsaññe. şkas meñyatse ne kapyāres wāsitses*
- 9 *ysāre rine plyasi wāya Toñkā şarmire şak cakañnma. şarmiretse kapci.*
- 10 *Prajñākarasometse wrātsaises kewye şalywe karyāmtē: trai şaṅkām, ysāresa cāk piş tom.*
- 11 *Simā Kurriñkātemtse yaitkorsa ywārş-şmañe pau[ş]yenta aşkār sasākauwa. şeyem yāwyem ykuweş re-*
- 12 *cye Cāsāmtse ysāre wsam: şak-tārya cakañnma piş tom. şau nesām.*
- 13 *warsaññe pārentiş mlyokotauşşe şalywe karyāmtē: şwer şaṅkām, ok tom ysāresa.*
- 14 *patalakşāşşemş pakeñe şwer komtsa laşşāte. pito ysāre kamāte: cāk wi tom.*
- 15 *Mikkaswiñitse Ynaikenta-hkhainta [kā]ryām: ysāresa piş tom.*

2.5. 和訳

- 1 月が終わった。 十月。 月の十日から Šopo*の Šimprāya*(?)に対する合計,
- 2 私達は小麦を挽いた。三十九石八斗。 Šaṅke が挽いた。
- 3 Sthere の Dharmarakṣite が調べ確認 (承認) した。Sthere の Ślawarme が調べ確認 (承認) した。
- 4 Warwaltsa (?) の Parramañi (?) の際に私達は牛酥を購入した。一升を五斗の小麦で, 三升。私達は小麦を与えた。一石五斗。
- 5 私達は paşkaro の油脂を購入した。四升, 八斗の小麦で。
- 6 私達は醬を三升購入した。六斗の小麦で。
- 7 私達は Sthere の Dharmarakṣite に乾麦を納めた。五石二斗。
- 8 月が終わった。 十一月。 月の六日, 浄人達の衣服のために
- 9 沙弥の Toñkā が売るために小麦を町に運んだ¹⁴⁾。十石。 沙弥の画指
- 10 Prajñākarasome の wrātsaise*のために私達は牛酥を購入した。三升, 一石五斗の小麦で。
- 11 司馬の Kurriñkāte*の命令により, 仲夏の徴収分が割り当てられていた (?)。yāwyem に赴いた,
- 12 軍属の Cāsām に私達は小麦を与えた。十三石五斗。抄も存在している。
- 13 十一月の満月のため, 私達は mlyokotau の油脂を購入した。四升, 八斗の小麦で。
- 14 patalakṣaṇa の仕事に従事する者が四日間働いた。代価として小麦を持って行った。一石二斗。
- 15 Mikkaswiñi のために (?) Ynaike の鞋 (?) を私達は購入した。五斗の小麦で。

14) ここで言う「町」とは城郭を有した集落を指している。しかし, この集落の規模を確定する事はできない。龜茲の都城若しくは州城などの可能性が考えられる。

2.6. 注釈

1. *meñye āra*: この部分は「月が終わった」と解釈できるが、ここに言う「月」とは、後続する部分で記述される月ではなく、先行する月に関して述べたものである事が、ドイツ・フランス所蔵の文書から推定される。また、8行目についても同様である。
1. *simprāyai sōpaiš*: Adams (2011) は、この表現を「冬至に至るまで」と解釈しているが、現在筆者らはこの見解に同意しない¹⁵⁾。筆者らは、*simprāyai* から推定される主格形である *simprāya** が、人名・地域・団体名などといったものを指す固有名詞ではないかと考えている¹⁶⁾。
 なお、トカラ語 B の *sōpaiš* は hapax であるため正確な解釈は困難であるが、Ching (2010) では、荻原の意見を参考にして、この部分を 'to *Simprāyo**, the *Sōpo**', 即ち「*Sōpo** という肩書を持った *Simprāyo** に対して」¹⁷⁾と解釈し、トカラ語 B の *Sōpo** を漢語の「處半」¹⁸⁾に対応するトカラ語 B の形式であると推定していた¹⁹⁾。しかしながら、本稿ではこの解釈を採用せず、以下の二つの可能性を指摘するに留めたい。[1] 以下の11行目に見られる *Kurrinkāte* は漢語の肩書である「司馬」を有しているが、名前に肩書が先行している事から、*Simprāya** がある特定の肩書であり、*Sōpo** (あるいは *Sōpiye**) が人名である。[2] トカラ語 B の *sōpo** (あるいは *sōpiye**) は社会経済的な事柄であり、先行する *Simprāya** は肩書であった。いずれにしても、この部分の解釈は今後の研究に俟ちたい。
3. *šarsa*: 麴氏高昌国時代及び唐代の寺院支出簿に見られる、上座・寺主などの高位の僧侶によって使用された「知」に相当する。トカラ語 B の寺院出納記録における事例については、Ching and Ogihara (2010: 85 n. 23) を参照。また、この部分の翻訳については、町田 (2009: 243) を参照。
4. *warwaltsaitse*: Ching (2010) で指摘したように、*warwaltsa** という語の単数・属格形であり、恐らく漢文文書に見られる「水碓に従事する人」を差すものと推定される²⁰⁾。なお、この *warwaltsa** について、Malzahn (apud Adams 2011: 46) は 'watermill' と見做してい

15) 詳細については、Ching and Ogihara (forthc.b) を参照。

16) ただし、ドイツ及びフランス所蔵のトカラ語 B の世俗文書には、この形式に類似したものとして *simprāye*/simpraye** と再建される形式が確認されており、これらの形式と当該文書に現れている *simprāya** が同一の実体を指していたか否か、ここでは判断できない。仮に同一の実体を指していたとするのならば、*simprāyai* という斜格形は後続する *sōpaiš* という向格形に含まれる斜格形の *sōpai* による影響から、この文書の筆者が本来 *simprāyem* とすべき箇所を *simprāyai* と誤った可能性を指摘する事が可能である。この仮説が成立するならば、主格は *simprāya** ではなく *simprāye** と再建される。

17) トカラ語文献においては、固有名詞と肩書が併記される場合に一定の順序は見られない。

18) 漢語「處半」及びウイグル語 *čuban* 'village headman' やコータン語 *čaupam* などの語に関しては、吉田 (2004) を参照。なお、*Pelliot Chinois* D. A. 4 and Cp. 31 にも漢語の「處半」が現れている点については、Trombert (2000: 49-50, 131-132) を参照。

19) 漢語「處半」及びウイグル語 *čuban* やコータン語 *čaupam* に対応するトカラ語 B の形式として推定される **sopam* が筆者によって複数形と解釈された結果、逆形成 (back formation) によって *Sōpo** という単数主格形が導き出された可能性を指摘した。

20) 7～8世紀の龜茲における「水碓」については、Ching (2010: 386, 407 及び 2011: 72) を参照。

るが、筆者らは「その管理人若しくはそこで労働に従事する者」を指すものと見たい²¹⁾。

4. **parramañi**: この語は、この文書と THT2679.2 にのみ現れる。この語形に関して、Peyrot (2008: 91) は、THT2679.2 に見られる *paramaṇi* を、梵語 *paramaṇi* に由来するトカラ語 B の形式である **paramāni* ‘excellent jewel’ と解釈している。一方、荻原は、この語を梵語 *pramāṇi* (MW: 686a) に由来すると解釈する²²⁾。この点については、トカラ語 B の *pramāṇ* (< Skt. *pramāṇa*- ‘measure, scale’)²³⁾ も考慮に入れるべきである。なお、本稿では、*warwaltsaitse parramañine* が「水碓の産量を確認する機会」、或いは「水碓を調整する機会」を指していると解釈する。
5. **paškaro**: この語は、油脂の原料を表していると推定される。Thomas (1957: 145 n. 13) では「油質の果実」であるとしている²⁴⁾。
6. **tsyāñk**: Ching (2010: 341, 387) で指摘しているように、漢語「醬」の借用語である。詳細については以下を参照。
9. **Toñkā**: 恐らくトルコ語の *Toga* を指していると推定される。また、このトルコ語の *Toga* はニヤ文書中の官名である *Tomğa* と関連があると思われる。なお、ニヤ文書中の *Tomğa* については、Burrow (1937: 95-96) を参照。
10. **wrättsaiseš**: イギリス所蔵断片 Kucha. 0190.2 には以下のように *wrättsaiseš* という異形態が確認される²⁵⁾。
[Kucha. 0190.2] *Sutane Pernaiysentse pakana retkemeṇ aškār kameṇ. wrättsaiseš: škas tom trey šāñkāṇ,*
「*Sutane* と *Pernaiyse* のために軍隊から返ってきた。*wrättsaise** のために。六斗三升 …」
ここに現れている *wrättsaise** は **wrättsaitstse* の Late Tocharian の語形であり、*wrättsai* に形容詞を派生する接尾辞 *-tstse* が付されたものである。ただ、この例では形容詞ではなく、名詞として使用されていると見做す事ができる。この語はトカラ語仏典では「…に対して」という意味を表すが、世俗文書においては **wrättsaitstse* は「返礼、払い戻し」を指していると推定される。ただ、何らかの儀式を指していた可能性も排除されない。
12. **yāywyem**: 音節構造から漢語の音写と推定される。この語は hapax であるため正しく比定する事はできないが、斜格形であると考えられるので、ここでは軍隊の移動の目的或いは目的地を指していると見られる。なお、この部分の表記に注目するならば、この箇所は

21) ドイツ所蔵トカラ語 B 寺院文書に見られる用例から、この *warwaltsa** は肩書であると推定される。例えば、THT2679.2: *Poylā(n)[ts]e parama[ñi] ///* という例が示すように、*paramaṇi* という語に先行する語は、その他の用例から見て肩書である。なお、トカラ語 B の *Poylā* の属格形 *Poylāntse* は THT2712.4 にも現れている。

22) この解釈は、Ching (2010: 341) で既に引用されている。

23) Adams (1999: 412) を参照。

24) 同様の解釈は、*TochSprR(B)I*: 63 Anm. 10 [translation] で既に指摘されている。

25) Ching (2010: 312-313) を参照。

<ya> で始まる *akṣara* が三つ連続しており、最後の一つが先行する *akṣara* に引きずられて書き誤った可能性も考えられる。もしこの推定が正しいならば、歴史的文脈から、この語の原語として推定される形式は **yāpwyem* であり、漢語の「押運」(EMC ?aip/?ε:p-wum^h, LMC ?ja:p-yñ) の借用語であると解釈される。なお、「押運」に関連する「行綱」については、荒川 (2010: 444-492) を参照。

13. **pārentiś**: この形式はトカラ語 B の *pālle_u* 「満月」の向格形である。具体的にどのような目的のためという事は明示されていないが、荻原は「満月」という事から、ここでは布薩を指していた可能性を指摘したい。トカラ語 B の世俗文書から知られている暦では、月は新月を起点としており、満月は15日に相当する。トカラ語文献には、梵語とトカラ語で書かれた *Posatha calendar* と称される文献が存在しており、荻原が確認している範囲内では、トカラ語 A に 2 点、トカラ語 B に 8 点残存している²⁶⁾。この文献は、戒本の最初の部分に見られる布薩が行われる日の指定を梵語でどのように述べるかを紹介した手引書であり、ドイツ所蔵の梵語断片として出版された SHT1656b1 には *[ś](i)k(a)[ñ]c(e) pāll(e)tn(e)[w](e)ṣle* 「十月の満月の日には (以下のように) 唱えるべきである」という記述が見られる²⁷⁾。この記述に従えば、本文書に見られる「十一月の満月のため」は布薩を指していた可能性を指摘する事ができよう²⁸⁾。
14. **patalakṣāṣe***: この語は **patalakṣām* から派生した形容詞である。この語幹は梵語の *paṭa-* 'textile' と *lakṣaṇa-* 'mark, sign' から成っているものと推定される。もしこの推定が正しいならば、**patalakṣām* は恐らく「布地に描かれた書かれた仏陀の肖像」を指していると解釈できるかも知れない。
14. **pakeñe**: この語は *pāke* 'part, portion, share' から派生した名詞である。Ching (2010) では人名と解釈したが、ここでは作業に従事する人を表す語と解釈する。
15. **Ynaikenta-hkhainta**: トカラ語 B の *Ynaikenta* は THT433.14²⁹⁾ で既に在証されており、この例から地名ではないかと思われる。ここでは、売買を扱った文脈で現れているため、慶は、この形式から推定される単数形の *hkhai** を漢語「鞋」(EMC γaij/γε:j, LMC xñja:j) の借用語ではないかと考えている。

26) この文献については、Ogihara (2009: 450-455; 2011: 125-128; forthc.) で扱った。

27) SHT(VII): 66 を参照。

28) ドイツ所蔵のトカラ語 A 断片 THT2387frg.1a1 (TITUS Tocharica で公開されている写真は表裏が反対である): /// (ma)ñis pā[ll](a)m[taṃ] t[rü]ñ[kä](l) [Skt.] /// 「… 月の満月の日には (以下のように) 唱えるべきである。[Skt.] …」に従えば、トカラ語 A 仏教でもトカラ語 B と同様の方法を採用した事が窺える。

29) THT433.14: *Ynaikentāñe [T]aiṣṣi śwāle wasa*. 「Ynaikenta の大使が食事を布施した」。なお、この用例に見えるトカラ語 B の *taiṣṣi* の比定については、Ching and Ogihara (2010: 86 n. 26) を参照。

2.7. 言語特徴について

Peyrot (2008: 233) で指摘されているように、本文書で使用されているトカラ語 B には Late 若しくは Colloquial と分類される段階の語形が確認される。既に述べたように、本稿は歴史学的分析に重点を置いているので、言語学的分析については、Ching and Ogihara (forth-c.b) を参照されたい。

2.8. 歴史学的分析

2.8.1. 発見場所について

既に Ching (2010: 86) で指摘しておいたように、Ot.12 は Otani 8058 という番号の漢文文書と一緒に *Kizil* 石窟で発見された「中央亜細亜的文字」で書かれた文書であると推定される。実際、大谷探検隊によって発見若しくは入手された「中央亜細亜的文字」による文書に関する散発的に見られる記述の内、Otani 8058 と一緒に発見されたもののみが本稿で議論している Ot.12 と外形的特徴が一致する。以下には、大谷探検隊の隊員であった渡辺哲信の日記を引用する³⁰⁾。

四月二十一日 火 ミン・ウイ 第七日

[略] ミン・ウイ中、東方仏洞の後背の一谷に、陰に十五と陽に十八の仏洞を発見す。人跡稀なる為め仏画は比較的完全なり。此の日発掘して獲たるものは、古銭一葉、金箔の小破片若干、古文字を記せる木片なり。砂中大なる蝎一尾を捕ふ。

四月二十二日 水 ミン・ウイ 第八日

堀氏と共に、人夫十一人を役して、南面せる山谷に在りて洞面西向する一洞と他の一洞を発掘す。紙片に古文字、同じく漢字あるもの、鉾先、靴形等を得。午後五時頃、発掘中の仏洞の天井崩壊して、巨岩轟然落下す。万一を警戒せし為め被害なし。

ここには、彼らが発見した漢文文書と非漢文文書の具体的な点数は記されていない。また、上の引用からは、渡辺が堀賢雄と共にそれらの文書を発見したものと理解する事ができそうである。そこで、以下には堀賢雄の日記を引用する³¹⁾。

四月二十二日 Wednesday 滞在第七日

朝飯は例の通り。起床六時三十分、朝食後生は三人の土民をつれて昨日 East-cliff の

30) 上原 (1937: 317) を参照。なお、引用している日記の内、Ot.12 に関すると思われる箇所は下線で示している。また、日記中の旧字体は現行の漢字に改めた。これらは、以下に引用する堀の日記でも同様。

31) 堀 (1959: 35) を参照。

1st Valley 頂にある Cave を発見せし所に出、Cave 内の撮影を Magnesia にてなし壁取二三をなし、又 excavate をしたるも得る所なくして一時頃に帰舎したり。

渡辺氏は朝より Caves in Valley corner of N-cliff に土民数人と excavate をなして鑛石を包む反古紙二枚を得、一は漢字一は中央亜細亜的文字にして、漢字の文は明かに「建中伍年云々」の文字を読まれたり。これを得て吾人は大ひに勇を得たり。其他に木片等二三を得たり。

午飯に Pola を食ひ、生も又 Caves に行きて、excavate を検したりしが午後五時を過ぎるまでに得し所は朝の分に比して少量紙片を得、(これは中央亜細亜的文字の紙片なり) Cave Temple の excavate なして外部より入りし sand を殆んど除きしに地盤も同じく四壁の如く彩色ある壁を用ひしことを発見せしに、殆んど土盤の地を除きし時 Caves 西北隅の天井土塊の大なるもの突然墜落したるに一同は大恐慌を生じ、茲に excavate は一挫折となりて廢す、但しこの天井土塊の墜落せしことは既に一同の察知せる所にして、この方の excavate はなさざりしかば、負傷せしもの一人もなし。

上の記述から窺えるように、実際には渡辺が午前中反故紙となっていた漢文文書と「中央亜細亜的文字」による文書の二点を発見し、午後渡辺と堀が二人でさらに数点の断片を獲得したと理解すべきである。ここで注目されるのは、午前中に発見された二点の文書については、「二枚」と記しているのに対して、その他のものについては、大谷探検隊が *Kucha* 地域で発見した「中央亜細亜的文字」による断片と同様に「紙片」と記述されている点である。また、この地域で発見されたとされる *brāhmi* 文書の内、Ot.12 のサイズ (41.1 × 29.0 cm) のみが Otani 8058 (28.8 × 37.5 cm) と一致している。そのため、1903年四月二十二日の午前中に Otani 8058 と共に発見された文書を Ot.12 とする事は妥当であると言えよう。さらに、Ot.12 の原文書には薄茶色の部分が現在も確認できる³²⁾。この文書は明らかに二つ折にされた後、何かを包んだものであると判断でき、このような状態は堀の日記にある記述と一致している。恐らくは、以下の図に示すような状態で鑛石を包んでいたものと推測される。



32) Munsell のカラーチャート (year 2000 revised washable edition) では 10YR7/4 'very pale brown' に相当する。ただ、10YR7/6 'yellow' や 10YR6/4 'light yellowish brown' に近いとも言える。即ち、この色は、フランス国立図書館のチャートの 'beige' (7.5YR 7/4~7.5YR6/4) よりも黄色であるが、やや淡く、'beige clair' (10YR7/4~10YR8/3) よりもやや濃い色である。

「建中五年」の紀年を持つ Otani 8058 は1988年に旅順博物館で展示されて以来、非常に高く評価されており、「孔目司文書」として中国や日本の研究者によって研究が為されている³³⁾。この文書は相互に関係している二点の漢文による公文書が張り付けられたものである。最初のものは「帖」で、二つ目のものは「抄」と呼ばれる形式の文書である。以下の録文は基本的に荒川 (1997) に準じたものであるが、句読点と読みに若干訂正を加えている。

Otani 8058 (現在の旅順博物館の所蔵番号では 20.1609)

- 1 孔目司 帖蓮花渠匠白俱滿失鷄³⁴⁾
 - 2 配織建中伍年春裝布壹伯尺。行官段俊々、
 - 3 趙秦壁、薛崇俊、高崇迪等。
 - 4 右仰織前件布、准例放掬拓、助屯及
 - 5 小々差科、所由不須牽挽。七月十九日帖。
 - 6 孔目官 任 □³⁵⁾
- [余白]
- — — — —

- 1 配織建中伍年春裝布匠蓮花渠白俱滿地黎
- 2 壹伯尺了。行官段俊々、薛崇俊、高崇迪、趙壁
- 3 等。七月廿日趙壁抄。

この文書は、784年頃に蓮花渠付近の場所で作成されたものと推測されるが、鑛石を包むために再利用されたものであるため、この水路が *Kizil* 石窟の付近に位置していたかは判断できない。悟空は787年頃龜茲城の西門の外にある蓮花寺について記録しているが³⁶⁾、その記録によると、水路は龜茲城附近にあったと考えられるかも知れない。そのため、Otani 8058 が *Kizil* 石窟の住人に関する行政文書であったとする事はできない。

筆者らは Otani 8058 を調査していないため、Ot.12 と Otani 8058 との関係については、今後の検討に俟ちたい。ただ、筆者らの推測が正しいとするならば、この二点の文書は鑛石を包むために再利用されたものであり、そのため、両者に共通した特徴が見られるはずである。例

33) 重要な研究としては、礪波 (1992)、王・劉 (1992, 1997)、小田 (1993, 1996: 70-77)、陳 (1997[1994]: 132-134, 1999)、凍 (1996)、荒川 (1997)、王 (1998)、Zhang (2000)、『大谷文書集成 参』(222頁)、郭・王 (2007) などを挙げる事ができる。

34) この人名と先行研究における異なる読みについては、Ching (2011: 66 n. 12) を参照。

35) ここに見られる漢字は、役人である「任」の署名であるが、以下に示すように、先行研究では様々な読みが提示されている。「選」(荒川1997, 王 1998)、「善」(凍 1996, Zhang 2000)、「置」(陳 1999)、「晉」(陳・劉 1997)、「營」(陳・劉 2005)。

36) T.51, no. 2089, vol. 1, 980c19-20 を参照。

えば、恐らく薄茶色の痕跡が見られる可能性がある。左側と右半分の真ん中付近の小さな破れ目は、類似した擦った痕跡かも知れない。しかしながら、二つの文書は長年にわたって別々の国で保管されただけでなく、裏打ちが施されている。Otani 8058 は1937年以前に、旧関東廳博物館の展覧会のために装飾された巻物として補修されており³⁷⁾、本来の状態を窺う事が困難になっていると思われる。

2.8.2. 記載形式

本文書は寺院の小麦の支出簿であるが、帳簿の記載方法は、筆者らが把握しているフランス及びドイツ所蔵のトカラ語 B の寺院穀物帳簿とは異なっている。一般的に言って、フランス及びドイツ所蔵の寺院の穀物出納記録（基本的には *Duldur-akhur* 及び *Kizil* 発見の文書）では、各支出項目の最初に日付が記載される。しかしながら、Ot.12 では特殊な場合（13行目に見える「十一月の満月の日のために」）を除いて、基本的に日付は記載されない。

もう一点注目すべきは、本文書に見られる大部分の小麦の支出は、僧侶が自ら何らかの物品を購入する（トカラ語 B の動詞 *kāryānte* が使用されている点に注意）ために為されており、1-3 行目にかけて見られる小麦の処理や 8-9 行目に見られる沙弥が町に小麦の販売に赴いたという記載に関してのみ、担当者を記録しているという点である。これは、恐らくこの帳簿を記録した僧侶本人が売買を行ったため、特別に署名や画指を必要としなかったものと考えられるが³⁸⁾、前者では *Śānke wātsa* 「*Śānke* が挽いた」という記載の後に本人の画指があり、それに二人の上座の署名が続くべきである。また後者では、沙弥の *Toṅkā* は「沙弥の画指」という記述の後に画指を行うべきであったと推定とされる。また、14行目に見られる職人に対する小麦の支払いの際には、受取人の画指だけでなく、その名前さえも書かれていない。もし、この文書が標準的な文書形式に則っていない草稿若しくは副本でないならば、この寺院がこのような規範とは合わない帳簿を作成する事を許可していたという事になる。いずれにしても、このような帳簿のあり方は *Duldur-akhur*³⁹⁾ や *Kizil* 発見のトカラ語 B の寺院出納簿とは異なっており、これらの支出簿が作成された地域や時期とは異なる寺院に属するものと推定する事ができよう。

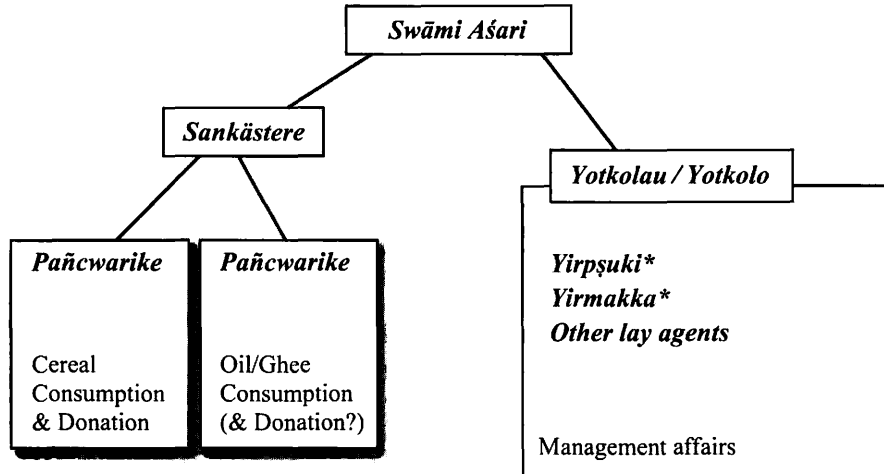
また、文書に記された記載から、僧侶の署名による手続きと寺院内部の等級制度を窺う事が可能であるが、それは、ドイツ及びフランス所蔵の寺院文書に反映されたものとは相違が見られる。即ち、現在ベルリンに所蔵されている *Kizil* 発見のトカラ語 B の寺院出納記録中には、筆者らが *main group* と称している文書群が存在しているが、Ot.12 に見られるような複数の

37) 小田 (1996: 77) を参照。

38) フランス所蔵 *Duldur-akhur* 発見のトカラ語 B による金銭の出納簿では、このような場合証人（通常は在家の信徒）の画指が付される。

39) *Duldur-akhur* 発見のトカラ語 B 世俗文書の書式については、Pinault (1994: 102-105) を参照。

Sthere による承認は確認されず、異なった制度や手続きを有していたものと思われる⁴⁰⁾。一方で、既に言及したように Ot.12 には *Ynaikenta* (l.14) という語が見られるが、この語は同じく *Kizil* 発見の THT433 にも表れていることから、当該文書の作成場所は *Kizil* からそれ程離れていなかったものと考えられる。以下には、*main group* の分析を通して確認された寺院制度を図式化して示したい⁴¹⁾。



2.8.3. Ot.12 の年代について

既に確認されているフランス・ドイツ・ロシア所蔵の紙に書かれたトカラ語 B の寺院文書は、大部分が唐代に作成されたものと確定する事ができる⁴²⁾。この文書について見れば、中国で使用されていた画指（トカラ語 B の *kapci*）⁴³⁾が使用されている他、*tsyānk* という明らかに漢語からの借用語が使用されており、これらは Ot.12 も唐代に作成されたという事を示している。では、この *tsyānk* の原語は何であったかという点について検討したい。中古音の対応から考えて、*tsyānk* に近い音を持つ物品として「薑」「醬」「漿」などが考えられる。しかし、「薑」は重さや個数で計算されるべきものであるために除外される⁴⁴⁾。次に「漿」は吐魯番文書では一般的に「葡萄漿」を指す。さらに、『新唐書』卷四十には、西州の貢物として「葡萄五物：酒，漿，煎，皺，乾」の記載が見られる。「麻札塔格出土盛唐寺院支出簿」に現れる一甕千文の高価な「甜漿」を、Trombert (2002: 535) は「葡萄漿」(*jus ou sirop de raisin*) と

40) ここで言及している *main group* の定義やこれらの文書群に反映された制度については、Ching and Ogi-hara (2010) を参照。

41) Ching and Ogi-hara (2010: fig. 2) より引用。

42) Ching (2010: 124-145) 及び Ching and Ogi-hara (2010: 98-112) を参照。

43) Ching and Ogi-hara (2010: 117-127) を参照。

44) 例えば、「唐天寶二年 (743) 交河郡市估案」では「胡薑」「高良薑」を「兩」で計算している (池田 1999: 185-186)。

見做している⁴⁵⁾。しかし、龜茲の状況に関して言えば、唐による支配以前に「葡萄漿」が食用されていた事は、玄奘がこの地に到着した際の僧侶による歓迎を伝える以下の記述が伝えるところである。

「法師至。諸德起來相慰訖，各還就坐。使一僧擎鮮華一盤來授法師。法師受已，將至佛前，散華禮拜訖，就木叉毬多下坐。坐已，復行華。行華已，行蒲桃漿。於初一寺受華受漿已，次受餘寺亦爾。如是展轉日晏方訖。僧徒始散。」(『大唐大慈恩寺三藏法師傳』卷2, T50, no. 2053, 226c5-10)

また、この他に『十誦律』にも関連する記述が少なからず見られる事から、この地域の人々には良く知られたものであり、漢語の借用語を用いて葡萄漿或いは葡萄醬を表す必要はなかったと考えられる。

そのため、この文書で使用されている *tsyānk* は「醬」(即ち大豆を主要な原料とした発酵食品であり、中国の伝統的な調味料の一つ)⁴⁶⁾の借用語と見做す方が妥当であろう。黄文弼によって *Tonguz-bashi* で発見された漢文文書(1958: 圖版柒壹(2))にも「醬」が在証され、この地域における使用が裏付けられる⁴⁷⁾。

- 1 □曆十四年米□□[數]。二月廿三日，白蘇畢梨領得
- 2 □屯米四斛半、麵壹碩捌斛、[醋]壹
- 3 [斛]、油叁勝、醬[叁]勝、酢五勝。

また、Ching (forthc.a) で扱ったように *ṣau* という語がこの文書には現れている。この語は漢語「抄」(コータン語では *kṣau*) のトカラ語 B の形式 **kṣau* の Late Tocharian の語形であると推測される。この文書の年代に関して井ノ口(1957: 184) は八世紀としているが、以上に述べた点から、この文書はこの地域における唐朝の支配が確立されて以後の時期、即ち692年から790年代にかけての時期に作成されたものと推定される。

その結果、この文書に現れる *Kurriṅkāte* の地位はこの時代背景の下に理解されるべきである。即ち、唐朝においては一般的に「司馬」は都護府、都督府や州と言った行政機関、若しく

45) Trombert (2002: 534-540) では、高昌出土の葡萄園に関する文書にある「甜醬」は「葡萄醬」(*moūt sucré*) を指すとしている。「唐神龍元年(705)公廩應收漿帳」(73TAM518: 2/11『吐魯番出土文書(叁)』p. 453) 及び「武周聖曆元年(689)前官史玄政牒為四角官葡萄已役未役人夫及車牛事」(64TAM35: 40 (a)『吐魯番出土文書(叁)』p. 521) を参照。

46) 『齊民要術』卷八「作醬等法」を参照。

47) この文書は、Zhang (2000: 143 n. 5) でも簡単に言及されている。なお、文書中の「白蘇畢梨」は、トカラ語 B の人名の *Supriya* の音写であると推定される。

は折衝府などの軍事機関の三番目か四番目の地位に相当する⁴⁸⁾。そのため、*Kurriṅkāte* は州、若しくは唐朝の行政・軍事機関の中級階層の役人に相当していたと思われる。ただ残念ながら、ここでは *Kurriṅkāte* がどの民族であったかを判断する事はできない。この文書が唐代のものであるとするならば、この文書に現れる人名や地名を解釈する際の手がかりを提供する。即ち、*Cāsām* という人名も漢語要素を含んでいると考えられ、特に第二音節の *sām* は「三」に相当すると思われる⁴⁹⁾。

もう一つの特徴は、Ot.12 には金銭の使用が見られない点である。ただ、この小麦の支出簿は金銭の記録を目的としたものではないという議論もあり得るが、8-9 行目にかけての小麦の売却に関して、その利益が記載されていない点は、この当時の経済状況についての疑問を抱かせる⁵⁰⁾。玄奘の記述から、七世紀初め頃龜茲では金銭・銀銭・銅銭などの複数の貨幣が流通していた事が知られている。一方、トカラ語 B の世俗文書には *cāne* と呼ばれる貨幣が、また木簡には *k_usāne* (「龜茲の銭」を指す) と称される貨幣が頻繁に確認される⁵¹⁾。648 年唐朝が龜茲を征服した段階において、この地域では貨幣経済が相当に発展しており、Ot.12 に見られるような小麦を用いてその他の物品を購入するという事は、木簡や紙文書を問わずトカラ語 B の経済文書にはほとんど見られない。例えば、唐代の *Nāśmi* 王の 4 年と 5 年に、*Duldur-akhur* の寺院の僧侶が労働者に対する支払や砂糖・酒・油の購入及びその他の目的に貨幣を使用した事は既に知られている⁵²⁾。また、*Duldur-akhur* 発見の文書ほど多くはないが、*Kizil* 発見の寺院文書にも⁵³⁾、同じ時期に書かれた金銭の記録が数点存在しており、貨幣の流通を窺う事ができる。さらに、*Kucha* 地域の多くの重要な仏教遺跡、例えば *Kizil*・*Duldur-akhur*・*蘇巴什*・*Kumtura* 千仏洞・*Tadjik* 千仏洞・*Jigdalik* 千仏洞などからは、唐代の貨幣を含めて様々な貨幣が出土している⁵⁴⁾。このような状況を考慮に入れて Ot.12 の様々な小麦の使用を見みると、非常に興味深い事が窺える。即ち、この文書は経済的に困難であった時期、恐らく

48) 『唐六典』卷三十。李 (2010: 26-52) を参照。

49) 残念ながら、第一音節の *cā* は比定には至っていないが、中古音から見て最も可能性の高いものは「車」である。また興味深い事に、トカラ語 B の人名には *ca-* で始まる名前の人物が他にも見られる。この点については、今後の研究に俟ちたい。

50) 他の記載と異なり、この取引に関しては小麦の価格を明記していない。既に Ching (2010: 473-477) 及び Ching (forthc.b) で述べたように、*Duldur-akhur* の寺院が布施された仏食を信者に外部に搬出させて現金に換金させる場合、取引が成立して収入を得る前に、既に帳簿に販売価格が設定され記載されている。本文書に価格の記載が欠けている事は、取引が成立しなかった事を示唆している可能性がある。

51) 最新の議論については、Ching (2010: 132-134) や Ching and Ogihara (2010: 101-104) 及び Ching and Ogihara (forthc.a) を参照。

52) Ching (2010: 150-233) で与えた転写と翻訳以外に、この寺院文書中の重要な例については、Pinault (1994: 91-109) で既に指摘されている。

53) THT463, THT2692, THT2730 を参照。THT2731 も恐らく同一の範疇に分類される。

54) 詳細については、Thierry (1997, 2000), Wang (2004: 37-44), 李 (2003), 新疆龜茲石窟研究所 (2008), Ching (2010: 70-72; 82-96) などを参考。

は都護府の末期に近い時期に作成されたのではないかという可能性を否定できない⁵⁵⁾。このような見方は、何故この文書が安西都護府の陥落の10年程前に作成された Otani 8058 と一緒に発見されたかを説明する事ができるように思われる⁵⁶⁾。

2.8.4. 文書に反映される経済活動について

前節では、この文書を八世紀即ち唐代とする井ノ口の見解が文書の内容からも支持される事を確認した。ところで、トカラ語 B の寺院文書にある穀物生産に関する記載に基づいた慶の研究によって、龜茲で流通していた暦法が基本的に中国のものと一致している点、及びトカラ語 B の文書に見られる四種類の主食の穀物が何であったかという点が、既に明らかにされている⁵⁷⁾。即ち、大麦 (トカラ語 B の *yap*) は一月末に種蒔きの準備を始め、六月初めに寺院に収める。七月には小麦 (トカラ語 B の *ysäre*) を、また九・十月には糜粟の類の穀物 (トカラ語 B の *āka* と *lyeksiye*)⁵⁸⁾ を寺院に収める。このような結果に基づいて、以下には、この文書に記載された各種の取引について検討する⁵⁹⁾。

Ot.12 には、この寺院の僧侶が小麦を使用して、牛酥・*paškaro* 油脂・*mlyokotau* 油脂・醬・衣服・鞋 (?) などの物品を購入した事が記録されている。その内、衣服と鞋については数量が明記されていないので比較は困難であるが。その他の物品については小麦との比較が可能であり、以下のように纏める事が可能である。

55) 筆者らは、この文書が原始的な物々交換の段階から貨幣経済の段階への過渡期を反映していると思ふよりは、むしろ唐朝による支配の後、ある種の歴史的な条件による制約の下に成立した状況を反映していると思いたい。

56) もし、この時期に貨幣が不足していたのであれば、この文書は物々交換に大きく依存した寺院経済の状況を反映しているのではないかと推定される。

57) Ching (2008) 及び Ching (2010: 383-385) を参照。

58) ここで挙げたトカラ語 B の二種類の穀物が、漢語のどちらに対応するかを確定する事は困難である。

59) 井ノ口は、本文書にあるトカラ語 B の *Warsaṇṇe* (トカラ語 B の暦法の十一月の呼称) が太陽暦の一～二月に相当するとしているが、上記の慶の研究から、この説は否定されるばかりか、この解釈はトカラ語 B の *Warsaṇṇe* を「雨月」とする解釈と矛盾する。即ち、太陽暦の一～二月は非常に寒く大地が凍結する時期であり、龜茲の気候では雨ではなく雪が降る時期に相当する。現在のところ、トカラ語 B の暦法の十一月 (*wārsaṇṇe*)、十二月 (*rapaṇṇe*) 及び一月 (*naimaṇṇe*) の名称の語源は完全には解決されていない。しかし、十一月の語源はインド語 (cf. Skt. *varṣa-*) と関連があるというよりは、Ching (2010: 462) で指摘したように、むしろバクトリア (覩貨邏國) の仏教の影響を指摘したい。即ち、『大唐西域記』卷一には、以下のような記述が見られる。

「出鐵門至覩貨邏國(舊曰吐火羅國訛也)。其地南北千餘里東西三千餘里。東扼葱嶺，西接波刺斯，南大雪山，北據鐵門。縛娑大河中境西流。自數百年王族絕嗣。酋豪力競，各擅君長。依川據險，分為二十七國。雖畫野區分，總役屬突厥。氣序既溫，疾疫亦眾。冬末春初，霖雨相繼。故此境已南，濫波已北，其國風土，並多溫疾。而諸僧徒以十二月十六日入安居，三月十五日解安居。斯乃據其多雨。亦是設教隨時也。」

(T.51, no. 2087, 872a5-15)

ここに引用した記述によると、*Balkh* を中心した地域では冬になると雨が降り始める。そのため、冬季を安居としており、これは『大唐西域記』卷二「前代譯經律者，或云坐夏，或云坐臘。斯皆邊裔殊俗，不達中國正音；或方言未融，而傳譯有謬。」(T.51, no. 2087, 876a16-18) に言及されているように「坐臘」と言われていた。このような状況を考慮に入れて、初めてトカラ語 B の暦法の十一月が雨月と称される理由が解釈されよう。ただし、トカラ語 B の月名については、今後の調査に俟ちたい。

牛酥一升⁶⁰⁾ = 小麦五斗

paṣkaro 油脂一升 = 小麦二斗

mlyokotau 油脂一升 = 小麦二斗

醬一升 = 小麦二斗

即ち、上の比較から、牛酥を除く三種類の物品と小麦との交換比率は一律 1:20 である事が窺える。このような同一の交換比率は非常に奇妙であり、例えば *paṣkaro* 油脂と *mlyokotau* 油脂の間に差異が見られず、区別する事ができない。ただ、非常に残念な事に、新疆出土文書には、醬や牛酥の価格を反映する資料は殆ど残されていない。特に、牛酥に関するものは非常に稀である。九世紀の敦煌文書から小麦と羊酥の交換比率が 1:20 であり、また帰義軍時代の小麦と（油麻製の）油の交換比率も 1:20 であった事が知られている⁶¹⁾。ただ、これらの情報は時代が異なるばかりか扱っている物品も完全に一致するわけではなく、この文書に反映される経済活動を理解するための参考とするわけには行かない。

ただ、ここで注目に値するのは、この寺院が淨人（トカラ語 B の *kapyāre*）の衣服—ここでは冬衣を指している—と見られる—を準備するために、沙弥に十石の小麦を町に運搬させている点である。当時の龜茲の市場での小麦の価格に関しては不明であるが、「麻札塔格出土盛唐寺院支出簿」を参考に、ある程度推定する事は可能ではないかと思われる。この文書に記されている開元九年（721）十一月十七日の項目には以下のような支出が記載されている。

出錢伍佰貳拾文・買土縹布一・長一丈・給付廚子家欽狀請充袴用。

池田（1996: 221）によれば、この年の小麦一斗の価格は三十文である。そのため、一丈の土縹布は、ほぼ小麦一石七斗三升に相当する。この価格に従えば、十石の小麦で大体六丈の布を購入する事ができる。

また、フランス所蔵の「唐天寶年代豆盧軍防人衣服點檢曆」（P.3274V^o）⁶²⁾には、以下のような記載が見られる。

複袴貳，一，生絹一疋充

複袴貳，一，綠綾一丈五尺充

60) Pierre Naert (1965) は、トカラ語 B の度量衡の *cāk* と *tau* について、漢語「石」「斗」からの借用語の可能性を指摘していた。その後、Sims-Williams and Hamilton (1990: 32) が、トカラ語 B の度量衡は漢語「升」「斗」「石」の借用語である事を指摘した。なお、トカラ語 B の度量衡については、Ching (2010: 378-382) 及び Ching and Ogihara (2010: 114-116) を参考。

61) 唐 (1997: 419, 421) を参照。

62) 唐 (1997: 434) を参照。

この記載から、一丈の布はほぼ二着の冬用の袴に充てる事が可能である事が窺え、六丈であれば、恐らく工賃も含めて、ほぼ十数着の袴を作る事ができよう。ただ、この情報を参考にして、Ot.12 を作成した寺院の人口を推定する事はできず、大凡の印象を与えるのみである。

また、九～十世紀の敦煌の鞋の価格は時期と品質や種類によって異なるが、価格は麥粟七斗或いは小麦一石二斗など一定した価格は見られない⁶³⁾。もし、この価格を参考にする事が可能ならば、Ot.12 の最後の行に記されている鞋の売買の数量は一足という事になり、在家の女性信者である *Mikkaswiñi* が履くためのものという事になる⁶⁴⁾。

さらに検討に値すべきは、何故この寺院が *warwaltsaitse parramañi** の際に、牛酥という比較的豪華な食品を購入したのかという点である。仮に *warwaltsa** と *parramañi** が、それぞれ「水磴に従事する人」と「計算、校正」と解釈されるならば、敦煌の寺院帳簿に参考となる記載が少なからず見られる。

寅年乾元寺堂齋修造兩司都師文謙諸色斛斗入破曆算會牒殘卷 (S.4782)⁶⁵⁾: 第32-33行
白麵伍斗、油貳升、粟玖斗、麥貳斗、已上充眾僧行磴日食用。

同上: 第37-38行
麵叁斗伍升、油壹升、麥柒斗、充兩日修磴食用。

唐光啟二年 (886年) 安國寺上座勝淨等諸色斛斗入破曆算會牒殘卷 (P.2838(2))⁶⁶⁾: 第54-55行
麵七斗、油肆升、酒壹瓮、徒眾磴戶商量打瀉(=闌)口日用。

己巳年 (909或いは969年) 某寺諸色入破曆算會殘卷 (S.1053V^o)⁶⁷⁾: 第52-53行
蘇貳勝、將往磴場破用。

癸酉年 (913年) 正月沙洲梁戶史汜三沿寺諸處使用油曆 (P.3578)⁶⁸⁾: 第13-14行
九月五日秋磴麵、油壹升、付汜法律、張法律。

辛巳年 (921或いは981年) 某寺諸色斛斗破曆 (P.3490)⁶⁹⁾: 第21-22行
油半勝壹抄、春磴麵看博士及磴上燃燈用。

63) 唐 (1997: 432-433) を参照。

64) トカラ語 B の形態論から *Mikkaswiñi* は明らかに女性を指している事が窺える。

65) 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋録』3: 309-312.

66) 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋録』3: 328-332.

67) 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋録』3: 339-341.

68) 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋録』3: 182.

69) 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋録』3: 186-191.

年代不明（公元十世紀中期）某寺諸色入破曆算會牒殘卷（S.5008）⁷⁰⁾：第13-14行
白麵壹碩叁斗，油貳升壹抄・麴陸斗・王上座保力二人圓磑用。

実際、「癸酉年（913或いは973年）六月一日磑戸董流達園磑所用抄録」（S.4373）⁷¹⁾の内容から、寺院が古い水磑を取り除いたり、新しく建てたりする場合に、橋の修築・閘門の修理・磑輪を備え付けるなどの作業に僧侶達を派遣し、なおかつ作業終了時には麵・酒・胡餅などの美食を共に食べたり、さらには「磑輪局席」を行う事さえも確認されている。この席上、寺院は羊・酒・豪華な食事（「細供」）で木匠や僧侶をもてなす。このような観点に立てば、Ot.12に見られる牛酥購入の記載は、恐らく僧侶達に水磑の修理を手伝わせた後、若しくは水磑の産量計算の商議が終了した後の食事として提供されるためであったと推定される⁷²⁾。いずれにしても、この水磑と寺院の間に何らかの利害関係があれば、寺院がそれに関わる人々をもてなしたり、彼らに食べ物を供与する事は決してあり得ない事ではない。ただ、ここで注意しておかなければならないのは、古代龜茲領内における水磑の管理状況に関する情報が不足しているという点である。Duldur-akhur 出土の O. 1508 は「大井館歩磑」に言及しているが⁷³⁾、これは必ずしも寺院に設置されていなければならない施設というわけではない。Duldur-akhur の寺院を例にして言えば、冬（十月十三日）に寺院が小麦を搬出して別の地で挽いて、その代価を支払った事が窺えるが、その価格（トカラ語 B の *waltsasintse pito*）として、十石の小麦に対して二石一斗の *lyeksiye*（上で述べたように糜粟の類の穀物）を支払っている。また、それ以前にも、数量は不明ながら小麦を挽いた代金として、3文銭・25文銭・27文銭を支出している⁷⁴⁾。Ot.12を作成した寺院が水磑を有していたか、若しくは水磑を運営する人々と関係があったかについては、現在までのところ明らかではない。そのため、*warwaltsa**を敦煌文書に現れる「磑戸」或いは「磑博士」と直接関係づける事は避けたい。

最後に、仮にトカラ語 B の *patalakṣā** が幡及び絹画の類の装飾を指すと解釈できるなら、この仕事に従事する職人に対する報酬が非常に高い点に注意したい。彼の四日間の労働の工賃は小麦一石二斗となっており、一日平均では三斗となる。ただ、実際には一日の食糧が一〜二斗と推定されるため⁷⁵⁾、ここには材料費などの支出も含まれているか、或いは非常に高い技術が必要とされたため、このような価格となったのではないかと思われる。いずれにしても、この点については不明な点が残されており、今後の研究に俟ちたい。

70) 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋録』3: 555-556.

71) 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋録』3: 183.

72) 磑博士をもてなすためのものであった可能性も排除されない。

73) 『大谷文書集成 壹』(72-73頁)を参照。

74) Ching (2010: 159-168, 175-177, 195-197)を参照。

75) 『唐六典』卷六を参照。

2.8.5. 納税の時期について

この文書の11-12行目には、寺院に割り当てられた仲夏の諸税 (*ywārs śmañe pauśyenta*) に関する記述が見られる。Adams (1999: 679) は Thomas (1957: 306) に従って、ここに現れる動詞 *sāk-* (ここでは過去分詞 *sasākau**) を 'remain (behind)' と解釈している。そのため、この動詞が現れる *pau[s]yenta aškār sasākauwa şeyem* は, "the tribute-payments were in arrears[?]" と解釈されている。論理的には、仲夏の税の支払いが十一月に行われたとするならば、この解釈は妥当と言える。また、龜茲では一般的に六月に収穫される小麦が税の対象であったと推定される。しかしながら、歴史学見地からは、この文書が780年以降に書かれたか否かによって、この解釈の妥当性が判断される。

現在までのところ、当時どのように徴税が為されたかという事を示す資料は非常に少ない。ただ、*Duldur-akhur* の寺院が税糧 (トカラ語 B の *śwelyank*) を六月から十二月の間に小麦で納入したという事が知られているに過ぎず⁷⁶⁾、これは、この問題を解決する参考とはならない。しかし、『唐六典』に記されている記載に従えば、冬に糧食を納入する事は必ずしも異例というわけではない。

租則准州土收穫早晚，量事而斂之，仲冬起輸，孟春而納畢。本州納者，季冬而畢。

(『唐六典』卷三)

たとえ、当時龜茲都督府が「正州」とは見做されていなくても、この政策は現地の役人にとって、納税の期限を算出する基準となった可能性は排除されない。

一方で、780年には両税法が実施されている⁷⁷⁾。そのため、Thomas や Adams が解釈するように、税が 'in arrears' の状態であったとするならば、この両税法が龜茲で実施されていたか否かという問題にも関係するが⁷⁸⁾、彼らの仮説は780年以降にこの文書が作成されたという事を意味する事になる。そして、恐らくは政治的・軍事的に不安定であったため、この年の税の徴収が遅れたか、若しくはこの寺院が小麦の納税を行うほど裕福ではなかったのであろう。これらの仮説は、上に述べたような、この文書の一般的状況と良く対応しているが、税糧は于闐において貞元六年 (790) 十月下旬にも依然として徴収されている点を考慮に入れなければならない⁷⁹⁾。いずれにしても、十一月の納税が遅いか否かを決定する事は、現時点においては非常に難しい。

一方で、もしこの時期の納税が八世紀の龜茲において通常のものであったとするならば、こ

76) Ching (2010: 134-147) 及び Ching and Ogihara (2010: 108-109) を参考。

77) 「其田畝之税，率以大曆十四年墾數為準，徵夏税無過六月，秋税無過十一月，違者進退長吏。」(『舊唐書』卷48)。

78) 760年代の吐蕃の河西回廊進出によって、四鎮と中央との連絡は大きく混乱していた。

79) 李 (2007: 15) を参照。

の記載は、龜茲の官吏が唐朝の要求を受けて後、一般住人に対して行った税の再配分であったと見做す事がより妥当のように思われる⁸⁰⁾。この解釈が成立するならば、この文脈における *sāk-* は、実際には 'fix (up)' や 'control' 若しくは 'regulate' を意味していたと推定される。

2.9. 結論

本稿で検討した Ot.12 は、文化的な面 (*tsyāñk* 「醬」や *hkhai** 「鞋」(?)) においても、また制度的な面 (*simā* 「司馬」) においても中国の影響を反映している。現在のところ、この文書が Kizil 石窟のどこで発見されたのか、またいつ・どこで作成されたのかを正確に特定することはできないが、この文書は明らかに唐の文化が龜茲に浸透していた時期に作成されたものと言える。そのため、この文書は、使用されている言語だけでなく歴史的な観点からも、かなり遅い時期のもののように思われる。また、この文書の11-12行目に言及されている軍隊の行軍と貨幣に対する言及が見られない点は、恐らくこの地域が厳しい状況下にあった事を反映している。「孔目司文書」と一緒に発見された可能性を考慮に入れば、この文書は八世紀後半から九世紀初頭にかけて作成されたものと考えられる。しかしながら、最終的な解決には、この二つの文書のオリジナルの比較や大谷探検隊の未公表の記録の出版などが必要とされる。

略号並びに参考文献

- EMC Early Middle Chinese (cf. Pulleyblank 1991)
 LMC Late Middle Chinese (cf. Pulleyblank 1991)
 MW *Sanskrit-English Dictionary*, by Monier MONIER-WILLIAMS. Oxford: Clarendon Press, 1899.
 SHT *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Teil 1-4, Wiesbaden; Teil 5-10, Stuttgart: Franz Steiner, 1965-2008.
TochSprR(B) SIEG, Emil and Wilhelm SIEGLING (1949 and 1953).

[欧文書目]

- ADAMS, Douglas Q.
 1999 *A Dictionary of Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
 2011 The Tocharian Word for 'solstice'? *Tocharian and Indo-European Studies* 12: 45-51.
 BURROW, Thomas (1937) *The Language of the Kharosthi Documents from Chinese Turkestan*. Cambridge: Cambridge University Press.
 CARLING, Gerd
 2009 *Dictionary and Thesaurus of Tocharian A. Volume 1: A-J*. In collaboration with Georges-Jean Pinault and Werner Winter. Wiesbaden: Harrassowitz.
 CHING Chao-jung 慶昭蓉
 2008 On the names of cereals in Tocharian B. Paper read at *The Scientific Conference Dedicated to Centenary since the Beginning of Deciphering of the Tocharian Texts* (Moscow— Saint Petersburg, August 25—27, 2008).
 2010 *Secular documents in Tocharian: Buddhist economy and society in the Kucha region*. Disserta-
 80) 于闐における税の再配分については、吉田 (2006: 117-141) を参考。

- tion thesis. Paris: École Pratique des Hautes Études.
- 2011 Silk in Ancient Kucha: on the Toch. B word *kaum** found in the documents of the Tang period. *Tocharian and Indo-European Studies* 12: 63-82.
- forthc.a On the word *ṣau* found in the Kuchean secular documents. In: CHEN Huaiyu and RONG Xinjiang (eds.) *Great Journeys Cross Pamir on the Silk Road: A Festschrift in Honor of Zhang Guangda on His Eightieth Birthday*, under review.
- forthc. b The activities of Sogdian Buddhists in Kucha as observed in the Tocharian B secular documents. In: M. De CHIARA, M. MAGGI and G. MARTINI (eds.), *Buddhism among the Iranian peoples of Central Asia*.
- CHING Chao-jung 慶昭蓉 and OGIHARA Hirotoshi 荻原裕敏
- 2010 Internal Relationships and Dating of the Tocharian B Monastic Accounts in the Berlin Collection. *Studies on the Inner Asian Languages* 25: 75-142.
- forthc.a. A Tocharian B sale contract on a wooden tablet. *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 5.
- forthc.b. On the Tocharian B monastic account in the Otani Collection. *Tocharian and Indo-European Studies* 13.
- COUVREUR, Walter
- 1954 Review of Wolfgang Krause, *Westtocharische Grammatik*. Bd. I: Das Verbum. *Göttingische Gelehrte Anzeigen* 208: 79-92.
- 1965 Koetsjische schrifttabellen in Slanting Gupta. *Orientalia Gandensia* II: 111-143.
- KRAUSE, Wolfgang
- 1952 *Westtocharische Grammatik. Band I. Das Verbum*. Heidelberg: Winter.
- LÉVI, Sylvain
- 1913 Le « tokharien B », langue de Koutcha. *Journal Asiatique*, 11^e série, 2: 311-380.
- LÉVI, Sylvain and Antoine MEILLET
- 1912 Les noms de nombres en tokharien B. *Memoires de la Société de linguistique de Paris* 17: 281-294.
- MALZAHN, Melanie
- 2007 Tocharian Texts and Where to Find them. In: Melanie MALZAHN (ed.), *Instrumenta Tocharica*, 79-112. Heidelberg: Winter.
- MIRONOV, N. D.
- 1928 Kuchean Studies I: Indian loan-words in Kuchean. *Rocznik Orientalistyczny* 6: 89-169.
- NAERT, Pierre
- 1965 Contacts lexicaux entre le tokharien et ses voisins non-indoeuropéens II. *Orbis* 14 (2): 528-536.
- OGIHARA Hirotoshi 荻原裕敏
- 2009 *Researches about Vinaya-texts in Tocharian A and B*. Dissertation thesis, École Pratique des Hautes Études.
- 2011 Notes on some Tocharian Vinaya fragments in the London and Paris collections. *Tocharian and Indo-European Studies* 12: 111-144.
- forthc. On the Poṣatha ceremony in the Tocharian Buddhist texts. *The Annual of Research Institute for Buddhist Culture Ryūkoku University (RIBC)* 35.
- PEYROT, Michaël
- 2008 *Variation and Change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
- PINAULT, Georges-Jean

- 1994 Aspects du bouddhisme pratiqué au Nord du désert du Taklamakan, d'après les documents tokhariens. In: 福井文雅 FUKUI Fumimasa and Gérard FUSSMAN (eds.), *Bouddhisme et cultures locales. Quelques cas de réciproques adaptations*. Actes du colloque franco-japonais (Paris, 23-27 septembre 1991), 85-113. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- 1998 Economic and administrative documents in Tocharian B from the Berezovsky and Petrovsky collections. *Manuscripta Orientalia* 4 (4): 3-20.
- 2008 *Chrestomathie tokharienne. Textes et grammaire*. Leuven: Peeters.
- PULLEYBLANK, Edwin G.
- 1991 *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver: UBC press.
- SCHMIDT, Klaus. T.
- 1986 Bemerkungen zur westtocharischen Umgangssprache. In: Annemarie ETTER (ed.) *o-o-pe-ro-si, Festschrift für Ernst Risch zum 75. Geburtstag*, 635-649. Berlin: de Gruyter.
- 1994 Zur Erforschung der tocharischen Literatur. Stand und Aufgaben. In: Bernfried Schlerath (ed.), *Tocharisch. Akten der Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft. Berlin, September 1990*, 239-283. (*Tocharian and Indo-European studies Supplementary series* 4). Reykjavík: Málvísindastofnun Háskóla Íslands, 239-283.
- SIEG, Emil and Wilhelm SIEGLING
- 1949 *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 1. Die Udānālaṅkāra-Fragmente, Text, Übersetzung und Glossar*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- 1953 *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 2. Fragmente Nr. 71-633*. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- SIMS-WILLIAMS, Nicholas and James HAMILTON
- 1990 *Documents turco-sogdiens du IX^e-X^e siècle de Touen-houang* (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part 2, Vol. 3: Sogdian, 3). London: SOAS.
- THIERRY, François
- 1997 On the Tang Coins Collected by Pelliot in Chinese Turkestan (1906-1909). In: 田辺勝美 TANABE Katsumi. Joe CRIBB and Helen WANG (eds.), *Studies in Silk Road Coins and Culture. Papers in Honour of Professor Ikuo Hirayama on His 65th Birthday*, 149-179. Kamakura: The Institute of Silk Road Studies.
- 2000 Entre Iran et Chine, la circulation monétaire en Sérinde du I^{er} au IX^e siècle. In: Jean-Pierre DRÈGE (ed.), *La Sérinde, terre d'échanges. XIV^{es} Rencontres de l'École de Louvre, 13-15 février 1996*, 121-146. Paris: La Documentation française.
- THOMAS, Werner
- 1957 *Der Gebrauch der Vergangenheitstempora im Tocharischen*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- TROMBERT, Éric
- 2000 *Les manuscrits chinois de Koutcha. Fonds Pelliot de la Bibliothèque nationale de France*. Paris: Institut des Hautes Études Chinoises du Collège de France.
- 2002 La vigne et le vin en Chine. Misère et succès d'une tradition allogène. *Journal Asiatique* 290 (2): 485-563.
- WANG, Helen
- 2004 *Money on the Silk Road, the evidence from Eastern Central Asia to c. AD 800*. London: the British Museum Press.
- YOSHIDA Yutaka 吉田豊

- 2007 Notes on the Khotanese Secular Documents of the 8th-9th centuries. In: Maria MACUCH, Mauro MAGGI and Werner SUNDERMANN (eds.), *Iranian Languages and Texts from Iran and Turan*. (Iranica 13, Ronald E. Emmerick Memorial Volume), 463-472. Wiesbaden: Harrassowitz.
- 2008 On the Taxation System of Pre-Islamic Khotan. *Acta Asiatica* 94: 95-126.
- ZHANG Guangda 張広達
- 2000 L'irrigation dans la région de Koutcha. In: Éric TROMBERT, *Les manuscrits chinois de Koutcha. Fonds Pelliot de la Bibliothèque nationale de France*, 143-150. Paris: Institut des Hautes Études Chinoises du Collège de France.

[和文書目]

荒川正晴

- 1997 「クチャ出土「孔目司文書」攷」『古代文化』49 (3): 145-162.

- 2010 『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋: 名古屋大学出版会.

井ノ口泰淳

- 1957 「大谷探検隊将来「観貨羅語文書寺院出納記録」について」『印度學佛教學研究』5-(2): 182-185.

- 1961 「トカラ語及びウテン語の佛典」『中央アジア古代語文獻』(西域文化研究IV), 京都: 法藏館, 317-388.

- 1995 「トカラ語及びウテン語の仏典」『中央アジアの言語と仏教』京都: 法藏館, 46-167.

上原芳太郎

- 1937 『新西域記』東京: 有光社.

小田義久 (編)

- 1984-2010 『大谷文書集成』京都: 法藏館.

小田義久

- 1993 「大谷探検隊将来庫車出土文書について」『東洋史苑』40/41: 3-23.

- 1996 『大谷文書の研究』京都: 法藏館.

香川默識

- 1915 『西域考古圖譜』東京: 國華社.

礪波護

- 1992 「孔目司帖」『旅順博物館所蔵品展』京都: 京都文化博物館, 157-158.

堀賢雄

- 1959 「堀賢雄西域旅行日記(二)」『中央アジア古代語文獻』(西域文化研究IV), 京都: 法藏館, 1-49.

町田隆吉

- 2009 「麹氏高昌國時代寺院支出簿の基礎的考察」『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』土肥義和 (編), 東京: 東洋文庫, 227-249.

吉田豊

- 2004 「čamūk の来源についての一考察」『中央アジア出土文物論叢』森安孝夫 (編), 京都: 朋友書店, 127-135.

- 2006 『コータン出土8-9世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』(神戸市外国語大学研究叢書第38冊), 神戸: 神戸市外国語大学.

[中文書目]

陳國燦

- 1997[1994]『斯坦因所獲吐魯番文書研究(修訂版)』武漢: 武漢大学出版社.

池田温

- 1996 「麻札塔格出土盛唐寺院支出簿小考」『段文傑敦煌研究五十年紀念文集』北京: 世界図書公司, 207-225.
- 1999 「新出《市估案》殘片錄文二種」『唐研究論文選集』北京: 中国社会科学出版社, 183-189.
- 凍國棟
- 1996 「旅順博物館藏“唐建中五年(784)孔目司帖”管見」『魏晉南北朝隋唐史資料』14: 120-139.
- 郭富純・王振芬
- 2007 「唐建中四年孔目司帖」『旅順博物館藏西域文書研究』瀋陽: 万卷出版公司, 34-44.
- 黃文弼
- 1958 『塔里木盆地考古記』北京: 科学出版社.
- 李方
- 2010 『唐西州官吏編年考證』北京: 中国人民大学出版社.
- 李肖
- 2003 「古代龜茲地區的磁冶遺址的考察與研究」『新疆文物』2003 (3/4): 16-26.
- 李吟屏
- 2007 「發現於新疆策勒縣的 C8 號至 C11 號唐代漢文文書考釋及研究」『新疆師範大學學報(社会科学版)』28 (4): 11-16.
- 唐耕耦
- 1997 『敦煌寺院會計文書研究』台北: 新文豐出版公司.
- 唐耕耦・陸宏基(編)
- 1986-1990 『敦煌社會經濟文獻真蹟釋錄』北京: 書目文獻出版社.
- 王珍仁
- 1998 「對旅順博物館藏〈唐建中五年孔目司公牘〉的再研究」『敦煌學刊』1998 (1): 39-46.
- 王珍仁・劉広堂
- 1992 「新疆出土的孔目司公牘析」『西域研究』1992 (4): 86-87.
- 1997 「旅順博物館藏唐建中五年孔目司公牘的再研究」『新疆文物』1997 (4): 22-28.
- 新疆龜茲石窟研究所
- 2008 「拜城溫巴什石窟調查簡報」『新疆文物』2008 (1/2): 1-9.

* 『仏教文化研究所紀要』に本稿を掲載するに際しては、入澤崇龍谷大学文学部教授並びに三谷真澄龍谷大学国際文化学部准教授にご尽力頂いた。特に記して、心よりお礼申し上げる。

[追記]

本稿入稿後に完成させた英語版について、Georges-Jean Pinault 教授並びにMichaël Peyrot博士より有益なコメントを頂いた。ここではその全てを反映できないため、英語版として出版予定のChing and Ogihar-a (forthc.b) も参照頂きたい。